聖墳墓教会の巡礼
—17 世紀聖地巡礼記から—

藤井　陽子

1. はじめに

エルサレムを中心に、ヨーロッパ・アジア・アフリカ大陸が 3 つの花弁のように広がった古地図がある[1]。地理的正確さには欠けるこの地図は、聖書の詩篇 74 章 12 節をその典拠としている。「しかし神よ、いにしえよりのわたしの王よ、この地に救いの御業を果たされる方よ」(« Deus autem rex noster ante sæcula : operatus est salutem in medio terræ »)という邦訳ではやや不明瞭だが、フランス語訳では « Pourtant, ô Dieu, mon roi dès l'origine, l'auteur des délivrances au milieu du pays »となり、「世界の中心」という解釈がよりわかりやすくなっている。

その「世界の中心」または「世界のへそ[2]」を示す石の盃は現在、聖墳墓礼拝堂の中に安置されているが、20 世紀初頭までは聖墳墓教会の内陣にあったという。イエスの墓の上に建てられたとされる聖墳墓教会は、世界の中心エルサレムのさらに中心であり、エルサレムを訪れたキリスト教徒の巡礼者たちにとっては聖地中の聖地とされる。この教会こそが巡礼の最終目的地であり、ここでこそ巡礼者の長くつらい旅の苦労が報われ、至高の幸福を得ることができると考えられていた。また、純粋な信仰心からというより興味本位で聖地巡礼に参加した人々にとっても、聖墳墓教会の訪問が旅のクライマックスであることは変わらなかったことだろう。

他の聖地と同様に聖墳墓教会内の聖所も、福音書などの聖書の記述を典拠とするものに加えて、聖ヘレナや十字軍にゆかりのあるものや、民間伝承的な起源を持つものとが入り混じっている。本稿では 17 世紀の聖地巡礼記の描写をもとに聖墳墓教会内の巡礼路をたどり、福音書に語られるイエスの受難を後世の巡礼たちがどのように追体験したのか紹介する[3]。

2. 聖墳墓教会の歴史と構造

135 年、ローマ皇帝ハドリアヌスはユダヤ人の反乱を平定するためエルサレムの街を破壊し、イスラエル人にエルサレムへの出入りを禁じた。コロニア・アエリア・カピトリーナと名付けられた新しい街が廃墟の上に建設されたが、そのさい街の城壁が北に 300 メートルほどずらされて

---

[1] Hans Bünting, *L'Itinerarium Sacrae scripturae*, Magdebourg, 1582, pp. 4-5 (in Marie-Christine Gomez-Géraud, *Le Crépuscule du Grand Voyage, Les récits des pèlerins à Jérusalem (1458-1612)*, Paris, Champion, 1999, p. 564).

[2] エゼキエル書 38 章 12 節。

[3] 主要参照文献は、Jean Boucher, *Le Bouquet sacré composé des plus belles fleurs de la Terre sainte*, éd. Marie-Christine Gomez-Géraud, Champion, 2008 ; Barthelemy Des Champs, *Voyage de la Terre Sainte et du Levant*, Liège, Pierre Danthez, [1678] ; Jacques Goujon, *Histoire et voyage de la Terre-Sainte*, Lyon, Pierre Compagnon et Robert Taillandier, 1672 ; Bernardin Surius, *Le Pieux Pelerin, ou Voyage de Jerusalem*, Bruxelles, François Foppen, 1666 ; Jean Thevenot, *Relation d'un voyage fait au Levant*, Paris, Thomas Joly, 1664 ; *Voyage à Constantinople, en Egypte, en Terre-sainte, dans quelques îles de l'Archipel, etc.*, Manuscrit conservé à la Bibliothèque municipale d'Amiens, cote Ms LESC 81B （以下 Manuscrit）である。

いる[4]。このときにフォーラムなどの中枢機関がおかれたのが聖墳墓教会の場所だという。紀元4世紀に聖ヘレナが十字架を捜索し発見したとされるのもこの場所で、この発見により336年ヘレナの子コンスタンティヌス帝の命で最初の教会が建立された。聖墳墓教会は614年ペルシャ人による火災のため焼失、再建されるも1009年にはファーティマ朝の第6代カリフ・ハーキムにより破壊された。1048年、ビザンツ帝国のコンスタンティノス9世モノマコスが廃墟の上にいくつかの礼拝堂を再建し、1099年以降の十字軍運動により再建の動きが加速、1149年には新しい教会が完成した。そののちも破壊や増改築を重ねたが、現在の教会はこの12世紀の建物を原型としている。なお、1808年の大火災により教会は甚大な被害を受けている。17世紀の巡礼者たちが見た聖墳墓教会と現在の建物の基本構造は変わっていないが、規模がいくらか縮小され、その後の火災や争いなどのせいで失われたものなどもある。

現在のエルサレム旧市街の北西部分を占めるキリスト教徒地区に位置する聖墳墓教会は、ヴィア・ドロローサの10〜14番目のステーション（留）を内包している。イエスが衣を脱がされた第10ステーション、十字架に釘を打たれた第11ステーション、その十字架が立てられた第12ステーション､マリアがイエスの亡骸を受け取った第13ステーションまでが教会入口のすぐ右手にあるゴルゴタにあり、第14ステーションの聖墳墓は教会の西側になる。その北側にはカトリックの礼拝堂やアパルトマンがある。聖墳墓礼拝堂の東側はギリシャ正教の内陣で、背後に半円形に礼拝堂が3つ並んでおり、中央と右側の礼拝堂の間に聖ヘレナ聖堂へと降りていく階段がある。

3. 聖墳墓教会内の12のステーション

17世紀当時のエルサレムはトルコ人の支配下にあった。カトリックの巡礼たちは街の北西にある聖救世主修道院（フランシスコ会）に滞在し、ここの修道士をガイド役に聖地巡礼するのが通例である。慣れない異国で無用なトラブルや命の危険に身を晒さないためであり、エルサレムを始めとするキリスト教の聖地を守るフランシスコ会士たちにとっても巡礼の無分別な行為を避けることは重要であった。したがって聖墳墓教会への巡礼も団体行動である。巡礼のメインイベントであるため、盛装した聖救世主修道院長が先導する。「修道院長が先頭に立って歩いた。彼はとても見栄えのする人物なので、疑いもなく荘重に、しかしつつましく歩みを進めた。修道院長は手にギリシャ風の司杖をもっていた。これは聖アントワーヌが描かれるときに持っているような不完全な十字架の形の杖のような軽い棒である。修道院長はキリスト教徒に会うとどこでも祝福を与えていた」[5]。

---

[4] したがってイエスの時代にはゴルゴタが街の城壁のすぐ外に位置していたことになる。逆にかつてはエルサレムの街の城壁内にあったシオン山は現在、旧市街の南の城壁の外側になっている。

[5] Manuscrit, *op. cit.*, p. 207 : « Le Père Gardien marchait le premier et comme il était un homme fort bien fait, il ne faut douter s'il marchait avec gravité mais modeste, portant dans sa main un pastoral à la façon grecque qui est un bâton léger comme une canne en forme de croix imparfaite selon qu'on dépeint saint Antoine abbé, et donnait partout la bénédiction où il rencontrait des chrétiens ». 当時の修道院長はフランシスコ・マリア・リーニ、1670年から1674年までフランシスコ会総長をつとめた人物である。なお、グージョンの聖地巡礼記（Goujon, *op. cit.*）はこの人物に献呈されている。聖アントワーヌは3〜4世紀のエジプト出身の聖人で、修道院生活の創始者とされている。「不完全な十字架」は、聖アントワーヌの持ち物とされるT字十字架のことであろう。

教会の入口には石のベンチがあり、トルコの役人が座っている。巡礼者はここで入場料として28 ピアストル払うが、聖職者は半額である[6]。徴収係は巡礼の名前を書きとめるため、一度払うと 2 回目はチップ程度で入場できたそうである。

中に入ると、巡礼たちはまず聖墳墓礼拝堂に祈りをささげ、それから教会の北側にあるフランシスコ会の礼拝堂へと入る。ここで巡礼の心得を聞いたり、それぞれの聖所でささげる祈りなどが書かれた小冊子を見たりして巡礼の準備を整える。教会内には以下の 12 のステーション（留）がある。

1. 笞刑の祭壇
2. 主の牢獄
3. くじ分けの礼拝堂
4. 聖ヘレナ聖堂
5. 十字架発見の礼拝堂
6. あざけりの柱
7. 十字架の礼拝堂
8. 磔刑の礼拝堂
9. 塗油の石
10. 聖墳墓礼拝堂
11. マグダラのマリアへの出現
12. 聖母への出現

3.1. 笞刑の祭壇

「ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した」[7]。ヴィア・ドロローサの第 2 ステーション、ピラトの総督官邸での出来事である。

聖墳墓教会の北側に位置する一角は、現在もフランシスコ会の修道教会を兼ねている。グージョンの地図によると、ここには食堂や修道院長の部屋のほかに、修道士や巡礼用の小部屋もあった。巡礼の行列はここから始まり、聖墳墓教会内を一周してここで終わる。この礼拝堂の名は、復活後のイエス=キリストが悲しみにくれる聖母マリアのもとに現れたという福音書にはないエピソードからとられており[8]、出現の礼拝堂または聖マリア礼拝堂と呼ばれている。デシャンは

---

[6] グージョンは 16 エキュ(*op. cit.*, p. 135)としている。テヴノーによると聖職者は半額でよかったそうである（Thevenot, *op. cit.*, p. 372）。

[7] マルコ福音書 15 章 15 節。

[8] この点について『黄金伝説』は、福音書はイエス=キリストの復活を証言するために書かれたもので、母の証言を採用することは客観性に欠けると判断したのではないかと説明している（Jacques de Voragine, *La Légende dorée*, tr. J. –B. M. Roze, Flammarion, 1967, t. I, pp. 277-278. 邦訳：ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』、人文書院、4 巻。第 2 巻、前田敬作・山口裕訳、1984 年、26～27 ページ）。

以下のように描写している。「ここには 5 段の美しい石の階段から上がる。礼拝堂は四角形で、東側の主祭壇の上部にあるたったひとつの窓から明かりをとっている。残りの部分は美しい絵や豪華な板石で飾られている。長さはだいたい 15 歩、幅は 12 歩ある」[9] 。

礼拝堂には 3 つの祭壇がある。東側に主祭壇、北側には十字架のかけらを祭った祭壇、そして南側に位置するのが笞刑の柱を祭った祭壇で、これが巡礼の第 1 ステーションになる。

> 入口の扉の近く左手に、主の笞刑の祭壇がある。その上にピラトの命令で主がくくりつけられ縛られ、そこで鞭うたれた柱の一部が保管されている。この柱は主のとても貴重な血を浴びた。聖ヒエロニスムの時代、そのあともこの柱はシオン山にあり教会のポルタイユを支えていた。そして異教徒たちに壊されてしまったのでかけらを集め、そのうちのひとつが鉄格子越しに見え触れられるようにこの場所に置かれている。
> 一番高いところには大理石の板にラテン文字でボニファス師[10] とやらが（明らかに当時の修道院長）、聖墳墓の内部・外部の大理石の飾りを修復した時がしるされている。柱の残りの部分はキリスト教国の複数の王侯の元に送られた。この柱は混色だがそれでも赤っぽく、それから茶斑石のように黒い部分にいくつかしみのようになっている。これはイエス＝キリストの血だと信じられている[11] 。
>
> この場所（出現の礼拝堂）から出ることなく、わたしたちは南側のもうひとつ別の祭壇に向かった。そこでは鉄格子のついた大きな壁龕が見える。その中には主が鞭打たれ、その尊い血を大量に流された柱の一部が保管されている。この柱は高さ 4 ピエ、赤よりも茶色味を帯びた大理石で、斑岩に似ていて白い斑点がいくつか散っている。この柱に見られる赤い染みはすべて大理石のもともとの色ではなく血の染みであるという人もいる。聖ヒエロニスムの記述によると、この柱はかつてシオン山の大教会のポルタイユを支えていた。そこでこの柱はとても敬われていたが、その後トルコ人によって 2 つに割られ、大きい方は長い間シオン山の聖トマ礼拝堂に保管されていた。小さい方の破片はローマの街へと運

---

[9] Des Champs, *op.cit.*, p. 495 : « L'on y entre par cinq marches de belles pierres ; elle est de forme carrée et elle reçoit sa lumière par une seule fenêtre qui est du côté d'orient au-dessus du maître-autel, ornée au reste de belles peintures et d'un riche pavé : sa longueur est d'environ quinze pas, et sa largeur de douze ».

[10] ボニファス・ステファニ (Boniface Stafani) は 16 世紀初頭ラグーザの近くで生まれ、1581 年に殺害された。1551 年聖地の副管区長としてエルサレムに派遣され（1551～1560 年）、1564 年再びエルサレムに戻った。1565 年に聖墳墓教会の屋根を修復している。

[11] Manuscrit, *op. cit.*, p. 215 : « A main gauche proche la porte de l'entrée, il y a l'autel de la flagellation de Notre Seigneur, sur lequel on conserve une partie de la colonne à laquelle Notre Seigneur fut attaché et lié par commandement de Pilate et y fut flagellé ou fouetté, et cette colonne fut arrosée de son sang très précieux. Du temps de saint Jérôme et même après, cette colonne était dans le mont Sion et soutenait le portail de l'église. Et comme elle fut rompue par les infidèles, on ramassa les pièces dont l'une a été mise dans ce lieu comme l'on voit et on la touche au travers d'une grille de fer. / Dans le plus haut, il est marqué en lettre latine sur une planche de marbre, le temps qu'un certain Père Boniface (apparemment pour lors Gardien) fit renouveler l'ornement de marbre qui est au-dedans et au-dehors du Saint-Sépulcre. Le reste de la colonne a été envoyée à divers princes de la chrétienté. Ladite colonne est d'une couleur mêlée, mais pourtant tirant plus sur le rouge et puis comme du porphyre brun, ayant quelques taches sur le noir qu'on croit être du sang de Jésus-Christ ».

ばれた。聖トマ礼拝堂にあったその柱は、数年後に聖墳墓教会およびシオン山修道院長だったボニファス師によって聖墳墓に移され、そこでいくつかの破片に分けられた。ひとつだけは今見られるところに残され、他の部分は教皇パウロ 4 世、皇帝フェルディナンド、スペイン王フィリップ、ヴェネツィアの元老院、ラグーザ共和国に送られた[12]。

リエージュの司祭もデシャンも同じエピソードを語っている。イエスが鞭打たれたときに用いられた柱は長年シオン山の教会のポルタイユを支えていたが、1551 年にオスマン=トルコによって教会は破壊され、カトリック教徒はシオン山から追われた。柱も破壊されたが、一部は聖墳墓教会内に保管され、残りの部分は聖遺物としてヨーロッパ各国に送られたということである。この柱には血が飛び散ったような赤い斑点が見られ、笞刑に処せられたイエスの苦痛や恥辱を容易に連想させるようになっている。

3.2. 主の牢獄

巡礼は手に火のついたろうそくを持ち、修道院長を先頭に 2 列になって次のステーションに向かう。8 世紀から「キリストの牢獄」と呼ばれている交差廊の北翼にあるくぼみで、現在はギリシャ正教徒が管理している。「この礼拝堂から出ると、修道士も巡礼もかわらず 2 列になって左手に向かい、そして主の牢獄とよばれる礼拝堂に向かう。ユダヤ人は十字架やその他のことが準備されるのを待つ間ここに主を閉じ込めた。この牢獄はかつて岩に掘られた雨水だめだったようで、低く暗い。ギリシャ正教徒とジョージア（グルジア）教徒がこの場所を管理しているが、いかなる尊敬の念も飾りもなく、悲惨な状態で維持されている」[13]。「この場所は暗い洞窟のようで、3 段の階段を下りていく。ここはギリシャ正教徒が祭務を執り行っている。祭壇が 3 つあり、常に 3 つのランプが燃えている」[14]。なお、福音書にはこの牢獄に関する記述はない。

行列はさらに進んで内陣の背後に回る。ここには 3 つの礼拝堂が並んでおり、一番左が十字架

---

[12] Des Champs, *op. cit.*, p. 459-450 : « Sans sortir de ce lieu [chapelle de l'Apparition] nous allâmes à un autre autel du côté méridional, où l'on voit une grande niche fermée d'un treillis de fer, dans laquelle se conserve une pièce de la colonne à laquelle notre Seigneur a été flagellé, l'ayant abondamment arrosée de son précieux sang : elle est haute de quatre pieds, d'un marbre tirant plutôt sur le brun que sur le rouge, semblable au porphyre, quelque peu tacheté de blanc : d'aucuns [certains] disent que tout le rouge que l'on y voit n'est pas la couleur naturelle du marbre, mais bien des marques de sang. Selon ce qu'écrit saint Jérôme, cette colonne soutenait du passé le portail de la grande église du mont de Sion, où elle était en très grande vénération, mais par après ayant été rompue en deux pièces par les Turcs, la plus grande a été longtemps gardée dans la chapelle de saint Thomas audit mont, et l'autre a été portée en la ville de Rome. Celle qui était dans ladite chapelle de Saint Thomas fut plusieurs années après transportée dans le Temple du Saint Sépulcre par le Révérendissime Père Boniface Gardien de cette même église et convent du mont de Sion, où il la fit diviser en quelques pièces, y ayant seulement laissé celle que l'on voit à présent, les autres furent envoyées au pape Paul IV, à l'empereur Ferdinand, à Philippe roi d'Espagne ; au Sénat de Venise, à la République de Raguse ».

[13] Manuscrit, *op. cit.*, p. 216 : « En sortant de cette chapelle, on prend à main gauche toujours deux à deux tant religieux que pèlerins, et on va à la chapelle appelée la prison de Notre Seigneur, dans laquelle les Juifs l'enfermèrent en attendant que sa croix et toutes autres choses fussent prêtes. Il semble que cette prison ait été autrefois une citerne taillée dans le rocher, basse et obscure. Les Grecs et les Géorgiens ont soin de ce lieu, quoiqu'ils la maintiennent misérablement sans aucun respect, ni ornement. ».

[14] Des Champs, *op. cit.*, p. 461 : « Ce lieu est comme un antre obscur dans lequel on descend par trois marches, et il est desservi par les Grecs qui y ont trois autels, et y entretiennent toujours trois lampes ardentes ».

上のイエスのわき腹を槍で刺したとされるローマ兵、聖ロンギヌスの礼拝堂である[15]。ここはステーションには数えられず、巡礼の描写も簡潔である。「聖ロンギヌスの礼拝堂は 4 ピエ四方あり、祭壇がひとつあってその前で 3 つのランプが燃えている。北側の壁には棚があって（わたしの判断だと）高さ 16 ピエ、幅 3 ピエ半、壁にうがたれた奥行きは 3 ピエあり、美しい柱やその他の貴重な作品で飾られている。言い伝えによるとここに長い間聖十字架が隠されて保管されていたという」[16]。

ロンギヌスはヨハネによる福音書では無名のローマ兵で、イエスの死に際して起きた様々な出来事によってキリスト教徒になったという[17]。聖ヘレナによって発見されたイエスのわき腹を刺したとされる聖槍は、ヴァチカンを始めとする各地で聖遺物として祭られ、後世にさまざまな伝説を生んだ。しかし、この礼拝堂には特筆すべき聖遺物もなかったようで、巡礼は特に何をすることもなく次のステーションに向かう。

3.3. くじ分けの礼拝堂

「兵士たちは、イエスを十字架につけてから、その服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。下着も取ってみたが、それには縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった。そこで、「これは裂かないで、だれのものになるか、くじ引きで決めよう」と話し合った。それは、「彼らはわたしの服を分け合い、わたしの衣服のことでくじを引いた」という聖書の言葉が実現するためであった」[18]。

聖ロンギヌス礼拝堂の隣が、イエスを十字架につけたのち、その服を兵士たちがくじを引いて分け合ったというくじ分けの礼拝堂である。ユダヤ教では大祭司の服には縫い目がないはずだと考えられていたので、この出来事もイエスが特別な存在であったことの証拠としてとらえられている。

「そこから兵士たちが救世主の服を分けあうためくじ引きをしたという場所がある内陣の背後の礼拝堂に向かう。ここはアルメニア教徒の管理である」[19]。「この（キリストの）牢獄から東

---

[15] ヨハネ福音書 19 章 34 節。なお、この礼拝堂は 12 世紀には聖ニコラ礼拝堂と呼ばれていた。

[16] Surius, *op. cit.*, pp. 483-484 : « la chapelle de saint Longin, ayant en son carré quinze pieds, pourvu d'un autel, devant lequel brûlent trois lampes […] On y voit dans la muraille vers le septentrion un armaire [armoire] lequel (selon que je puis juger) est haut seize pieds, large trois et demi, et profond trois pieds dedans le mur, orné de belles colonnes et autres ouvrages curieux où (selon la tradition) on a longtemps conservé et caché la sainte Croix ». 「それから後ろに方向転換して左手に、大教会の建物の方へと向かい礼拝堂と祭壇の前を通るが、ここではお辞儀もしない。救世主の十字架につけられた罪状書きが長い間この場所に保管されていた。現在ではこの罪状書きはローマのサント＝クロワ＝ド＝エルサレム教会で展示されている」 (Manuscrit, *op. cit.*, p. 216 : « Puis tournant en arrière et prenant à main gauche, vers ou dans la fabrique [édifice] de la grande église, on passe devant une chapelle et un autel où on ne fait aucune révérence. Le titre qui fut mis sur la croix du Sauveur fut conservé longtemps dans ce lieu et présentement on le montre à Rome dans l'église intitulée Sainte-Croix-à[de]-Jérusalem »). ヨハネ福音書 19 章 19 節 :「ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それには、「ナザレのイエス、ユダヤの王」と書いてあった」。

[17] Jacques de Voragine, *op. cit.*, t. I, pp. 466-467（ウォラギネ『黄金伝説』、第 2 巻、234～235 ページ）.

[18] ヨハネ福音書 19 章 23-24 節。詩篇 22 章 19 節を引用している。

[19] Manuscrit, *op. cit.*, p. 216 : « De là on va dans une autre chapelle derrière le chœur dans le lieu où les soldats partagèrent et jetèrent le sort pour les habits du Sauveur. Les Arméniens en prennent le soin ».

に 43 歩のところで、わたしたちは大内陣の背後にあるアルメニア教徒のもうひとつの礼拝堂に入る。ここは救世主の服を兵士たちが分けた場所である（と信じられている）。救世主は十字架につけられているのに、彼らは縫い目のない主の衣服についてくじを引いた」[20] 。

巡礼の記述には礼拝堂の具体的な描写が少ないが、ブーシェによると長さ 10 ピエ、幅 8 ピエの小さな場所だという[21] 。ここは現在もアルメニア教会が管理している。

3. 4. 聖ヘレナ聖堂

行列はくじ分けの礼拝堂の右側にある階段から聖ヘレナ聖堂へと降りていく。コンスタンティヌス帝の母ヘレナが十字架を発見する話は『黄金伝説』に詳しい[22] 。326 年にエルサレムを訪れたヘレナはユダヤ人学者を招集し、イエスの十字架のありかを尋ねたという。現在はアルメニア教会の管理で、階段のふもとから奥まで 20 メートル、横幅は 15 メートルの広さがある。奥の祭壇の右側から十字架が発見された小礼拝堂へ降りていくようになっている。

> 聖ヘレナ聖堂は聖墳墓教会にある中で最も美しく大きいもののひとつで、とても美しくきれいな、さらに幅 1 ピエ、長さ 8 歩の 30 段の階段を下りていく。この聖堂は 5 つのアーチを支えるかなり太い 6 本の柱に支えられている。中央のアーチは他のアーチよりもずっと高く、この教会の丸天井をなしている。長さは 25 歩、主祭壇の置かれた壁龕を含めて幅は 15 歩ある[23] 。
>
> ここには祭壇が 2 つあり、ひとつは聖十字架に、もうひとつは良い盗賊に捧げられている。この礼拝堂はこの教会の中で一番ゆったりとしていて、4 本の柱で支えられた美しい丸天井で飾られている。地下にあるので、場所の湿気のせいで柱からは絶えず水滴が滴っている[24] 。

この聖堂のほぼ中央には、デシャンの描写のように丸天井を支える 4 本の柱が立っている。グージョンが数えた 6 本の柱と 5 つのアーチについてはどの部分を数えたのか判然としない。なお、この礼拝堂には十字架を発見する間、ヘレナが座っていたとされる椅子が残されている。「礼拝堂

---

[20] Des Champs, *op. cit.*, p. 463 : « A quarante-trois pas de cette prison vers l'orient, nous entrâmes dans une autre chapelle qui est par-derrière le grand chœur, desservie par les Arméniens. Ç'a été en ce lieu (comme l'on croit) que les soldats partagèrent entre eux les vêtements du Sauveur, tandis qu'il était attaché à la croix, et qu'ils jetèrent le sort sur sa robe sans couture ».

[21] Boucher, *op. cit.*, p. 226.

[22] Voragine, *op. cit.*, t. 1, pp.341-350（ウォラギネ『黄金伝説』、第 2 巻、177～195 ページ）.

[23] Goujon, *op. cit.*, p. 149 : « La chapelle de Sainte-Hélène est l'une des plus belles et des plus grandes qui soient au Saint-Sépulcre, où l'on descend par un escalier de trente degrés de fort belle pierre polie, de plus d'un pied de large, et long de huit pas. Elle est soutenue de six colonnes assez grosses pour soutenir cinq voûtes : dont celle du milieu qui est plus élevée de beaucoup que les autres, fait le dôme de cette église. Elle a vingt-cinq pas de longueur, y comprenant la niche où est placé le maître-autel : elle est large de quinze pas ».

[24] Des Champs, *op. cit.*, p. 468 : « l'on y voit deux autels, l'un de la Sainte Croix, et l'autre dédié au bon larron : c'est la plus ample de toute cette église, et elle est embellie d'un beau dôme soutenu par quatre piliers de marbre qui distillent continuellement des gouttes d'eau à cause de l'humidité du lieu, comme étant souterrain ».

にはかなり大きな祭壇が 2 つありこの聖女のために複数のキリスト教国の王の命令で建てられた。11 段の階段の上にある最初の祭壇の左手に白大理石のいすがある。聖なる神秘を探させている間、ヘレナが座っていたと言われている」[25] 。現在見られる祭壇とヘレナ像は 19 世紀にメキシコ皇帝マクシミリアン・ドートリッシュが寄贈したものである。

3.5. 十字架発見の礼拝堂

聖ヘレナ聖堂の主祭壇の右側から 11 段の階段を下りると、十字架が発見された第 6 ステーションにたどりつく。

> さらに前進し左手の小さな扉の中へ入り、聖ヘレナ礼拝堂へ 30 段の階段を下りる。ここから岩に刻まれた 11 段の階段を下り、3 本の十字架と主の十字架につけられた罪状書きの板、茨の冠、釘や槍が発見された穴に向かう。現在そこには祭壇があり、ここが主の十字架があった場所で、岩のくぼみにランプが置かれ、前述の品々が発見された場所だと言われている。この穴はかつては「死体の谷」[26] と呼ばれていた。処刑された死刑囚の死体や処刑台、十字架や普通に穴を埋めるためにあらゆるゴミが捨てられていた場所で、町の外、カルヴァリオの丘のふもとにあった[27] 。
>
> この礼拝堂はすべて岩に穿たれ、その丸天井はかなりいびつである。入って右側、7〜8 ピエくらいは 8〜9 ピエくらい低くて、他の部分は 28 か 30 ピエくらい高くなっている。長さは 15 ピエ、幅は 8 ピエある。一番奥、東側にわたしたちの指導する祭壇があり、ここがあの聖なる貴重な聖遺物が発見されたまさにその場所である。（中略）祭壇に向かって右側に別の祭壇があり、こちらは離教者たち他の教会の修道士に属している[28] 。
>
> この洞窟は一番狭いところで長さ 28 ピエ、幅 16 ピエある。わたしたちはその半分を管理していて、十字架が見つかったまさにその場所に祭壇をたてた。残りの半分はギリシャ正教に属していて、今日でも救世主の受難の時にできた大きな岩の裂け目を見ることができ

---

[25] Manuscrit, *op. cit.*, p. 217 : « Elle [chapelle de Sainte-Hélène] a deux autels assez grands, elle a été bâtie par ordre des plusieurs rois chrétiens à l'honneur de cette sainte. A main gauche du premier autel sur lesdits onze degrés, il y a une siège de marbre blanc sur laquelle on dit qu'elle était assise pendant qu'on cherchait des saints mystères ».

[26] エレミヤ書 31 章 40 節 :「死体と灰の谷の全域」。

[27] Manuscrit, *op. cit.*, pp. 216-217 : « Plus avant en entrant dans une petite porte à main gauche, on descend par trente degrés dans la chapelle de Sainte-Hélène. Et de là on va par onze autres coupés dans le rocher, dans la fosse où les trois croix furent trouvées comme aussi le titre de celle de Notre Seigneur, la couronne d'épine, les clous et la lance, et où on voit à présent l'autel, on dit être le lieu où celle de Jésus-Christ était, et où les lampes sont dans la concavité du rocher, on y a trouvé le reste que dessus. Cette fosse était appelée du passé *Vallis Cadaverum* ou la vallée des cadavres, hors la ville sous le mont Calvaire où l'on jetait les corps justiciés [exécutés], leurs potences, les croix et généralement toutes les ordures pour la remplir ».

[28] Goujon, *op. cit.*, p. 146 : « Cette chapelle est toute piquée dans le roc, dont la voûte est fort inégale : car à la droite en entrant, l'espace de sept à huit pieds elle est basse de 8 à 9 pieds et le reste est élevé de 28 ou 30. Elle a quinze pas de longueur et huit de large, à l'extrémité de laquelle, tirant au levant, est un autel sous notre conduite, qui est l'endroit même où cette Sainte et précieuse relique fut trouvée […] Du côté de l'épître il y a un autre autel qui appartient aux autres religieux schismatiques de différentes nations ».

る。それぞれの国の人がここにいくつかの燃えるランプを置いている[29]。

ヘレナが見守る中、聖遺物が数多く発見されたとされるこの場所には、ゴルゴタ（カルヴァリオ）で処刑の際に用いられた物や、時には死体も埋められていたという。現在は南北に約 8 メートル、東西約 5.3 メートルの大きさで、階段の対面の壁際に祭壇が立てられている。

3. 6. あざけりの柱

「そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、侮辱した」[30]。

一行は聖ヘレナ聖堂の階段を上り、左隣りにある次のステーションに向かう。ここにはイエスがローマ兵たちに侮辱されたときに縛り付けられていたとされる「あざけりの柱」の断片が保管されている。福音書には柱そのものに関する記述はないが、ローマ兵がイエスを侮辱するために仮装の王のような扮装をさせたというこのエピソードは、先の笞刑と同じくピラトの総督官邸での出来事である。この柱は 12 世紀にはこの場所に祭られていた。

> 一番上まで上ってここから出ると、ヘレナの礼拝堂の入口から少し離れた同じ左手にある別の礼拝堂に入る。この礼拝堂は木の格子で前面を閉じられている。カトリックの友人であるアビシニア人がここを管理している。この礼拝堂の祭壇の下に恥辱の柱と呼ばれる柱がある。これはピラトの部下たちが（主を鞭打った後）茨の冠をかぶせ古い紫の衣を着せて「わたしたちの王」といいながら手に王杖のかわりに葦をもたせたときに主に王座として与えたのと同じものだ。この柱は白と灰色が混じった大理石でかなり太い。ここには壁はなくて鉄格子がある[31]。
>
> わたしたちはアルメニア人の礼拝堂に入る。ここは共通して戴冠と非難の礼拝堂と呼ばれている。イエス=キリストがピラトの兵たちに紫のマント、手に葦の王杖、茨の冠をかぶらされて馬鹿にされつばを吐かれ、平手打ちされたときにイエスが縛り付けられていた柱の一部がここに保管されているのでこう呼ばれているのだ。鉄格子をはめた壁龕の下にこの柱が展示され、その前では常にランプが 3 つ燃えている。柱は高さ 3 ピエ、かなり太く

---

[29] Des Champs, *op. cit*., p. 469 : « Cette grotte a pour le moins vingt-huit pieds de longueur, et seize de largeur : nous en tenons la moitié, et nous y avons dressé un autel sur le même lieu où fut trouvée la Sainte Croix ; l'autre moitié appartient aux Grecs, où l'on voit encore aujourd'hui une grande fente dans le rocher qui se fit au temps de la Passion du Sauveur ; chaque nation y entretient quelques lampes ardentes ».

[30] マタイ福音書 27 章 28～29 節。

[31] Manuscrit, *op. cit*., pp. 217-218 : « Étant entièrement remontés et sortant de là, on visite une autre chapelle à la même main gauche peu éloignée de l'entrée de l'autre, laquelle est fermée par-devant avec des grilles de bois, elle est gardée par les Abyssins Indiens [chrétiens de l'Éthiopie], amis des catholiques. Sous l'autel de cette chapelle il y a la colonne appelée de l'opprobre, laquelle est la même que les ministres de Pilate donnèrent à Notre Seigneur comme pour un siège royal quand (après l'avoir fouetté) le couronnèrent d'épines, l'habillèrent d'une robe vieille de pourpre et lui donnèrent un roseau pour sceptre dans ses mains disant *Ave Rex Noster*. Cette colonne est de marbre mêlé de blanc et gris et est assez grosse, où il n'y a la muraille, elle a des grilles de fer ».

て白よりは灰色を帯びた色で黒と白の斑点がある[32]。

柱のそのものの描写にはそれほど相違はないが、この礼拝堂の管理に関しては意見が分かれている。ブーシェ、テヴノー、リエージュの司祭はエチオピアのアビシニア教会の管理としている一方で、デシャンとシュリウスはアルメニア教会の管理としている[33]。ちなみに現在はギリシャ正教が管理している。

3.7. 十字架の礼拝堂

「そして、イエスをゴルゴタという所—その意味は「されこうべの場所」—に連れて行った」[34]。

巡礼たちはあざけりの柱の礼拝堂から 8〜10 歩ほど離れた階段を上り、聖墳墓教会の入口のすぐ右手にあるゴルゴタに向かう。19 段の階段は下の方が木製、上部は石でできている。

> ここから同じ側に 8 から 10 歩離れたところで 2 回に分けて 19 段の階段を上り（一部分は木でできていて内陣の周囲にある柱廊もしくはギャラリーと同じで、他の部分は石でできている。こちらは壁のくぼみの中にある）、カルヴァリオまたはゴルゴタの丘に登る。ここはまた族長アブラハムが「主は備えてくださる」と呼んだ場所である。この場所はユダヤ人には恐れられている。彼らはこの場所で処刑される者をすべて殺し、獣を殺し、町のすべてのゴミや汚物を捨てていたからである。そして主に最大の恥と恥辱を与えるため、彼らはこの同じ場所で 2 人の盗賊の間に主を十字架にかけたのである[35]。

福音書のクライマックスともいうべき出来事の舞台となったこの場所は、旧約聖書のエピソードとも無縁ではない。ここはアブラハムが「ヤーウェ・イルエ（主は備えてくださる）」[36] と呼んだ場所とされ、また、階下にあるアダムの礼拝堂は最初の人間アダムの頭蓋骨が発見された場所とされている。イエスは、族長アブラハムが一人息子のイサクを神に捧げようとしたように、自らを神に捧げた者として、さらには最初の人間、つまり全人類の父アダムに代わる存在として

---

[32] Des Champs, *op. cit*., p. 471 : « nous entrâmes dans la chapelle des Arméniens nommée communément la chapelle du Couronnement et d'impropère ; d'autant que l'on y garde la pièce d'une colonne à laquelle Jésus-Christ fut mis par les soldats de Pilate lors qu'il fut revêtu d'un manteau de pourpre tenant un roseau en main, couronné d'épines, moqué, craché, et souffleté : on la montre sous l'autel dans une niche fermée d'une grille de fer, devant laquelle il y a toujours trois lampes ardentes : elle est haute de trois pieds, fort grosse, et d'une couleur qui tire plus sur le gris que sur le blanc avec des tâches noires et blanches ».

[33] Boucher, *op. cit*., p. 228 ; Thevenot, *op. cit*., p. 380 ; Surius, *op. cit*., p. 468.

[34] マルコ福音書 15 章 22 節。

[35] Manuscrit, *op. cit*., p. 218 : « De là, environ huit à dix pas du même côté, l'on monte en deux fois par 19 escaliers (dont une partie est de bois et dans le même portique ou galerie qui va alentour du chœur et l'autre est des pierres, laquelle est dans la concavité de la muraille) sur le mont de Calvaire ou Golgotha, et autrement appelé par le patriarche Abraham *Dominus Videt*. Ce lieu était en horreur auprès des Juifs parce qu'ils y faisaient mourir tous ceux lesquels étaient condamnés au supplice, tuaient les bêtes et jetaient toutes les ordures et les vilainies [ordures] de la ville. Et pour faire plus grande honte et d'infamie à Notre Seigneur, ils le crucifièrent dans la même place entre deux larrons ».

[36] 創世記 22 章 14 節。

とらえられている。

現存のゴルゴタは 1810 年に修復されたもので、下からの高さは 5 メートルほど、広さは 11.5 メートル×9 メートルあまりの小さな場所である。東の壁際に磔刑の祭壇、イエスが十字架につけられた祭壇、その間にマリアが十字架から降ろされたイエスの遺体を受け取った祭壇がある[37]。しかし、17 世紀のこの場所には、入口の南側に第 7 ステーションのイエスが十字架につけられた十字架の礼拝堂、北側に第 8 ステーションの磔刑の礼拝堂が並んでいた[38]。

> 十字架の穴の場所と磔刑の場所は 2 つの礼拝堂に分かれているとはいえ、この 2 つは同じ丸天井の下にあり、間にはたった 1 段の階段と中央に太い柱が 1 本あるだけだ。この柱が 2 つの礼拝堂を分ける 2 つの美しいアーチを支えているのだが、まるで 1 つの正方形の小礼拝堂であるかのようで、だいたい 38 ピエの長さがある。西側には美しい手すりがあってそこからは聖墳墓礼拝堂を含む教会の大部分が見える[39]。
>
> この礼拝堂のある同じ山の反対側には（というのも 2 つの礼拝堂は同じ部屋にあり、中央のカーテンと柱で区切られているだけだからである。この柱は山の丸天井と前面を支えていて教会の交差廊となっている）、主が横たえられ、十字架に縛られ釘を打たれた場所が見える[40]。

礼拝堂の床にはさまざまな種類と色の正方形の石が敷きつめられている。

> さまざまな色の四角形の石で敷かれた敷石で、床に印をつけられた場所を歩いたり通ったりすることは誰であろうと許されていない。それどころか、この場所にふさわしい尊敬と崇拝の中にここを維持しなければならない。ここで主がその尊い血を大量に流されたのだから。カトリックの司祭がここでミサを上げていたのはそれほど遠くない過去だ。つまりこの相応に高くなり飾られた 2 つの祭壇で、という意味だ。しかしギリシャ正教徒がわたしたちを追い出すためにトルコ人に与えた多額の金のために彼らに譲らねばならなかった。それにもかかわらずわたしたちの修道士たちは変わらず 33 のランプを維持しており、ここには誰ひとりとして信心の心なく入る者はおらず、みな裸足で入る[41]。

---

[37] 立山良司『エルサレム』、新潮社、＜新潮選書＞、1993 年、169 ページ図版。

[38] Gomez-Géraud, *op.cit.*, p. 443.

[39] Des Champs, *op. cit.*, pp. 477-478 : « Or quoi que les lieux du trou de la croix et du crucifiement soient séparés et divisés en deux chapelles, si est-ce qu'ils sont sous une même voûte, n'y ayant qu'une marche et un gros pilier au milieu, soutenant deux belles arcades qui en fait la séparation, de manière que ce n'est qu'un seul oratoire de forme carrée, et d'environ trente-huit pieds de longueur. Du côté occidental il y a un beau balustre, d'où l'on découvre une bonne partie de l'église avec le Saint-Sépulcre ».

[40] Manuscrit, *op. cit.*, p. 220 : « De l'autre côté sur cette même montagne de la chapelle mentionnée (parce que l'une et l'autre sont dans une même chambre avec la seule séparation d'un rideau et d'une colonne au milieu, laquelle soutient la voûte et la façade dudit mont servant de croisade [transept] à l'église), on voit la place où Notre Seigneur fut étendu, attaché et cloué sur la croix ».

[41] Manuscrit, *Ibid.* : « Il n'est permis à qui que ce soit de marcher ou passer sur la place marquée sur la terre d'un pavé

長さ 13 ピエ、幅 7 ピエあり、ここでは碧玉、大理石、斑岩しか見られず、これらの石が美しい床を作っている。しかしこの床はわたしの救世主のすべての場所と再び開かれたその体のすべての傷から、特に主の手足の 4 つの傷から流れた血によって聖別された岩を覆っている[42]。

現在はカトリックの祭壇であるが、リエージュの司祭の記述からはこの聖所がカトリックとギリシャ正教の争いの種になっていたことがわかる。イエスはこの礼拝堂の中央で十字架に釘打たれたとされる。

3.8. 磔刑の礼拝堂

「十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。われわれは、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた」[43]。

第 8 ステーションがイエスと 2 人の盗賊の十字架が立てられた場所である。ここはギリシャ正教が管理している。

最初にわかるのはイエス＝キリストがわたしたちの罪をあがない、神の慈悲とわたしたちを和解させるために、2 人の盗賊に挟まれて十字架の上で顔を西に向けて、父なる神にあの神聖な犠牲をささげた場所である。その場所は壁に向かって入口の左手にある。床の敷石から 2 ピエ高くなって、幅 7 ピエ長さ 10 ピエの祭壇の形になっている。つまり北側（右手）にある良い盗賊の十字架から南側（左手）の悪い盗賊の十字架までということだ[44]。

---

fait en carrure [forme carrée] avec des pierres de diverses couleurs, ains [mais] il la faut tenir dans le respect et la vénération due comme ce lieu le mérite, Notre Seigneur y ayant répandu en abondance son très précieux sang. Il n'y a pas longtemps que les prêtres catholiques y disaient encore la messe, j'entends sur ces deux autels honnêtement élevés et ornés. Mais il a fallut céder aux Grecs pour la grande somme d'argent qu'ils donnèrent aux Turcs pour nous en chasser, nonobstant nos religieux y maintiennent toujours 33 lampes ardentes et personne n'y va sinon avec dévotion et à pieds nus ».

[42] Goujon, *op. cit.*, p. 154 : « Il est long de treize pieds et large de sept : où l'on ne voit que jaspe, que marbre, que porphyre, qui font un fort beau pavé ; mais il couvre le rocher sanctifié par l'écoulement du sang de mon Sauveur par tous les endroits et toutes les blessures de son corps que l'on rouvrit : et surtout par les quatre plaies de ses mains et de ses pieds ».

[43] ルカ福音書 23 章 39～43 節。

[44] Manuscrit, *op. cit.*, p. 219 : « La première chose qu'on trouve est le lieu où Jésus-Christ fit ce très saint sacrifice à Dieu son Père pour satisfaire à [réparer] nos péchés et nous réconcilier avec la divine miséricorde, pendant entre deux larrons sur l'arche de la croix avec le visage ou la face vers le couchant. Ce lieu est à main gauche de l'entrée vis-à-vis de la muraille, relevé du pavé environ deux pieds et fait en forme d'un autel large de sept pieds et long de dix, savoir depuis la croix du bon larron, laquelle est à main droite vers septentrion, jusqu'à celle du méchant, laquelle est à main gauche vers midi ».

入って少し左側に床から 2 ピエは高くなった祭壇のようなものが見える。白大理石の板で覆われ、幅 8 ピエ、長さ 12 ピエある。この祭壇は血の祭壇と呼ばれ、その真ん中に丸い穴があり、ここが救世主の十字架が、わたしたちの救済のためのあの貴重な保証が立てられたところである[45] 。

礼拝堂の奥（東側）に高さ 60 センチほどの祭壇があり、ここに十字架を立てた跡とされる穴が 3 か所あいている。中央がイエスの十字架、向かって左側が最期のときに改心した良い盗賊のもので、向かって右側が十字架上でもイエスをののしった悪い盗賊の穴とされる[46] 。イエスと悪い盗賊の穴の間には岩の裂け目が通っており、その分良い盗賊よりもイエスから離れている。

聖十字架が立てられた穴はこの祭壇の真ん中にある。主の死のときにできた岩の裂け目のせいですこし悪い盗賊の方に長くなっているが。この穴は丸くて深さ 1.5 ピエ、幅は半ピエの直径がある。もう少し高いところに銀で飾られた開口部があり、ここには浮彫の受難の一部が含まれている。この祭壇も飾られ上も下も白大理石で覆われている。2 人の盗賊の十字架が立てられた場所はいくらか高くなっていて印と記憶のために 2 本の柱がある。良い盗賊の十字架が立てられた場所は前述の穴から 4 ピエ半離れている。悪い盗賊の方は岩の裂け目のせいで 6 ピエくらい離れている。この裂け目は 4 分の 3 ピエあり、真ん中にある。（中略）カトリックは、このギリシャ人に属する祭壇でミサを上げることはできず、祈りをささげるだけで満足しなければならない。常に燃えている 47 のランプがある[47] 。

3 ピエの高さの木の小さな柱が 2 本あり、それらの上に小さな十字架があって、それが 2 人の盗賊の十字架が立てられた場所を示している。その真ん中であの無実の子羊が磔刑に処されたのだ。北側の良い盗賊の十字架の場所は救世主の十字架からは 5 ピエだけ離れている。悪い盗賊の十字架の場所は南側で 7 ピエ離れている。わたしたちの主が亡くなった

[45] Des Champs, *op. cit.*, p. 473 : « En entrant vous voyez un peu à gauche comme un autel relevé du pavé de deux bons pieds, couvert de tables de marbre blanc, large de huit pieds et long de douze : cet autel s'appelle l'Autel sanglant, au milieu duquel il y a un trou de forme ronde, où la Croix du Sauveur, ce très précieux gage de notre salut, a été plantée ».

[46] のちに良い盗賊はディスマス、悪い盗賊はゲスマスと名付けられた（Voragine, *op. cit.*, t. 1, p.257 : ウォラギネ『黄金伝説』、第 1 巻、507～508 ページ）。

[47] Manuscrit, *op. cit.*, pp. 219-220 : « Le trou dans lequel fut plantée la sainte croix est au milieu de l'autel susdit, excepté qu'il s'allongea un peu plus vers le méchant larron à cause de l'ouverture du rocher qui se fit à la mort du Sauveur. Ledit trou est rond et profond d'un pied et demi et large d'un demi en diamètre. Et un peu moins plus en bas, il a la bouche embellie d'argent, laquelle contient en partie la Passion faite en relief. Le même autel est aussi orné et couvert de marbre blanc en haut et en bas. Les places où les croix des deux larrons étaient plantées sont un tant soit peu plus relevées et il y a deux piliers pour servir de marque et mémoire. / La place où était plantée la croix du bon larron est éloignée quatre pieds et deux quarts dudit trou, et celle de l'autre environ six pieds à cause de l'ouverture, laquelle est de trois quarts de pied et laquelle est au milieu. [...] Les catholiques ne pouvant dire la messe sur cet autel appartenant aux Grecs, ils doivent se contenter d'y faire leurs prières. Il y a toujours quarante-sept lampes continuellement ardentes ».

時にこちら側にできた岩の裂け目のせいである[48] 。

イエスの十字架が立てられた穴は、レリーフを施された銀の板で覆われ保護されている。

岩に穿たれた穴は、上の方が直径 1 パルムくらいある。この穴は初期のキリスト教徒の無遠慮な敬虔さによってかなり小さくなっている。彼らは好きなだけ周りを削ってしまったのだ。現在穴は銀の板で覆われている。この板には浮彫でいくつか模様が彫られている。東側には十字架に架けられたイエス=キリストの像、そのわきにはヘビの高揚の姿などである。この板は岩全体を覆ってるが、底と左側の一部分だけは例外で、そこに触れることができるが口づけはできない。この穴は深さ 1 クデくらいある。わたしはここに彼らの贖い主を殺させてしまったあの忌まわしい神殺したちに対する恐怖に震えずにここに近づくことができなかったと告白する[49] 。

この穴は深さ 2 ピエもなくて半径はだいたい 1 ピエくらいである。縁は 5 ドワの幅で銀の板でぐるっと飾ってあり、その上にはギリシャ文字が見える。内部は銀の板で飾られているようで、そこには受難の神秘がいくつか彫られているようである。岩に指で触ったり、遠慮もなくかけらを持っていくことができないようになっている[50] 。

イエスは西を向いて十字架に架けられたので、良い盗賊はイエスから見て右手に、悪い盗賊は左手に位置することになる。イエスと悪い盗賊の十字架の穴の間にはイエスの死の直後に起こった地震[51] でできたとされる岩の割れ目があり、そのせいで悪い盗賊の方が良い盗賊よりもイエスから離れてしまったという。この穴と割れ目に関する言い伝えは 4 世紀からのもので、割れ目は地球の中心まで続いているとも言われている。

ゴルゴタの礼拝堂の真下がアダムの頭蓋骨が発見されたとされるアダムの礼拝堂で、最初の人間であるアダムから始まった全人類の罪を贖うために、イエスがそのアダムの頭蓋骨の上で血を

---

[48] Des Champs, *op. cit.*, p. 474 : « il y a deux petites colonnes de bois hautes de trois pieds, et sur icelles une petite croix, qui marquent le lieu où furent plantées les croix des deux larrons, au milieu desquels cet Agneau innocent fut crucifié : le lieu de la croix du bon larron qui est vers le septentrion, est éloigné de celui de la croix du Sauveur cinq pieds seulement ; et celui de la croix du mauvais, qui est du côté du midi, sept, à cause de la fente du Calvaire qui se fit de ce côté-là du temps que mourut Notre Seigneur ».

[49] Goujon, *op. cit.*, p. 159 : « Le trou dans lequel la croix était plantée, est piqué dans le rocher, large au-dessus d'une palme de diamètre : duquel on a beaucoup diminué, par l'indiscrète piété de nos premiers chrétiens, qui tous en taillaient tout autant qu'ils en voulaient. Il est à présent couvert d'une platine d'argent où sont relevées en bosse plusieurs images, à l'orient est l'image de Jésus-Christ crucifié, à côté est la figure de l'exaltation du serpent, et ainsi du reste. Cette platine couvre le rocher entièrement, excepté au fond, et un peu à la gauche où l'on le touche, mais il n'est pas possible de le baiser. Ce trou est profond d'une coudée approchant, et j'avoue qu'il me fut impossible de l'approcher sans me sentir frémir d'horreur, contre ces infâmes déicides qui y firent mourir leur Rédempteur ».

[50] Des Champs, *op. cit.*, p. 473-474 : « ce trou n'a guère moins de deux pieds de profondeur, et il en a presque un de diamètre : les bords sont garnis tout alentour d'une lame d'argent large de cinq doigts, sur laquelle l'on voit quelques caractères grecs ; par-dedans il est semblablement garni d'une platine d'argent où sont gravés quelques mystères de la Passion, à ce que l'on ne puisse toucher le roc avec les doigts, et par indiscrétion en emporter quelques pièces ».

[51] マタイ福音書 27 章 51 節。

流したという受難の意義を象徴するような場所である。

> この礼拝堂はカルヴァリオの丘のすぐ下にあり、その東の端がイエス=キリストが亡くなった場所に対応している。祭壇の奥の岩の裂け目が見えるのでそのことがわかる。礼拝堂は長さ 15 歩、幅 8 歩で、高さ 9 ピエの壁で分けられている。そこに祭壇に面して扉があり、その後ろには高さ 3 パルム、幅 2 パルムの窓があって、言い伝えによるとそこがアダムの頭蓋骨が発見された場所である。それは十字架の穴のすぐ真下である。ここでわたしたちの最初の親の頭を発見したので、アダムの礼拝堂と呼ばれるようになった[52]。

> そしてその祭壇の後ろにはまた、山の裂け目が見える。その中には穴がひとつ開いていて、そこには常に燃えるランプが置かれている。うやうやしくもこの穴の中でわたしたちの最初の父であるアダムの頭蓋骨が発見されたと言われている。アダムはかつてここに住んでいた。大部分の人はアダムがヘブロンに埋葬されたと主張してるにもかかわらず（このことはあとで述べる）[53]。

このアダムの礼拝堂の入口部分に、かつてはエルサレム王ゴドフロワ・ド・ブイヨンとその弟ボードワン 1 世をはじめとするエルサレム王の墓が安置されていた。1810 年にギリシャ正教徒に破壊され現在では見ることができないが、17 世紀の巡礼たちはその墓碑銘を書きとめている[54]。

3. 9. 塗油の石

「彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ」[55]。ピラトに願い出てイエスの遺体をもらいうけたアリマタヤのヨセフとニコデモが、遺体を清めて亜麻布で包み埋葬の準備をしたとされる場所を記念しているのが第 9 ステーションの塗油の石である。ギリシャ正教徒にとってはイエスが十字架から降ろされ、マリアがその遺体を抱えて嘆き悲しんだ場所とされている。

> 教会の交差廊のもう少し先の方に、まだカルヴァリオの丘の下だが、階段から 30 歩ほど離れた、教会の入口もしくは扉の向かいに、床の敷石の中に石がある。この石の上によき

---

[52] Goujon, *op. cit.*, p. 162 : « Cette chapelle est immédiatement sous le Calvaire, dont, l'extrémité au soleil levant répond à l'endroit où Jésus-Christ mourut : puisqu'on y voit la fente du rocher derrière l'autel. Elle est longue de 15 pas et large de 8 elle est séparée, par une muraille haute de 9 pieds où il y a une porte vis-à-vis de l'autel, derrière lequel est une fenêtre haute de 3 palmes et large de deux, où la tradition enseigne, que la tête d'Adam se trouva, qui est le lieu immédiatement sous le trou de la croix : et parce qu'on y a trouvé la tête de notre premier parent, elle a pris le nom de la chapelle d'Adam ».

[53] Manuscrit, *op. cit.*, pp. 220-221 : « Et derrière son autel, l'on voit encore l'ouverture de la montagne dans laquelle il y a un trou et il y a toujours dans celui-ci une lampe ardente. On dit pieusement qu'on a trouvé dans ce trou la tête de notre premier père Adam pour y avoir autrefois demeuré, quoique la plupart tient qu'il a été enseveli en Hébron comme je dirai ailleurs ».

[54] Manuscrit, *op. cit.*, pp. 221-222 ; Des Champs, *op. cit.*, pp. 500-501 ; Goujon, *op. cit.*, p. 163.

[55] ヨハネ福音書 19 節 40 節。

人々が座り（と言われている）、彼らは主が十字架から降ろされるのに立ち会い（アリマタヤのヨセフやニコデムやその友人たちのように）主をユダヤ人の習慣にしたがって運び、ミルトとアロエの油を塗って布の死帷子でおおい、まだ誰も置かれたことのない新しい墓に埋葬した。ヨセフが庭の隣の岩に新しく掘らせた墓だという。
塗油の石は緑色で、白大理石の板で覆われている。石は（小さな赤と黒の板で飾るために真ん中に少し飾りがあるのを含めると）だいたい 8 から 9 ピエの長さがあり、幅は 2 ピエ半ある。周囲には小さな円形の、高さ 1 ピエ半の鉄格子がある。8 個のランプがつりさげられている[56] 。

教会に入って最初に出会ったのが塗油の石だった。共通する言い伝えによると、十字架から降ろされた贖い主の体がアリマタヤのヨセフとニコデモによってこの石の上で油と香料を塗られたためにこのように名付けられている。この石は教会の入口からだいたい 18 歩離れていて、ほとんど入口の正面にある。石の長さは 8 ピエ、幅は 2 ピエともう少しある。聖ヘレナが今見られるようにこの石を覆わせた。石は緑色を帯びていて、床から 5 ドワは高くなっていて、通る人々の足が石を少しも汚したりしないように高さ 1 ピエの鉄製の小さな欄干でぐるっと囲まれている。夜も昼もずっと燃えている銀の美しいランプがいくつか下がっている[57] 。

この緑色の石は聖墳墓教会の入口の正面に位置しているので、巡礼たちが聖墳墓教会で一番最初に気づくのはこの石である。現在の石は 1810 年に置かれたもので、長さ 2 メートル、幅 70 センチほどの石の板で、8 つのランプが上部に飾られている。

3.10. 聖墳墓礼拝堂

「イエスが十字架につけられた所には園があり、そこには、だれもまだ葬られたことのない新しい墓があった。その日はユダヤ人の準備の日であり、この墓が近かったので、そこにイエスを

[56] Manuscrit, *op. cit.*, p. 222 : « Un peu plus avant au milieu de la croisade [transept] de l'église et encore sous le mont Calvaire, en distance des escaliers environ 30 pas vis-à-vis de l'entrée ou de la porte de l'église dans le pavé d'en bas, il y a la pierre (comme il est dit) sur laquelle les bonnes personnes, lesquelles assistèrent à descendre Notre Seigneur de la croix (comme Joseph d'Arimathie et Nicodème et autres amis), le portèrent selon la coutume des Juifs pour l'oindre de myrrhe et d'aloès et l'enveloppèrent dans un suaire de toile, et l'ensevelirent dans un sépulcre nouveau dans lequel personne n'avait jamais été mise et que ledit Joseph avait fait couper hors d'une roche voisine d'un jardin. / La pierre de l'onction est verdoyante, couverte d'une planche de marbre blanc. Elle a de longueur (y compris un peu d'ornement fait au milieu pour l'embellir avec de petites planches rouges et noires) environ huit à neuf pieds et de largeur deux et demi. Il y a une petite treille [treillis] de fer rond qui est alentour, haute d'un pied ou environ. Il y a huit lampes qui sont suspendues ».

[57] Des Champs, *op. cit.*, p. 457 : « La première chose que nous rencontrâmes en entrant, ce fut la pierre d'Onction : elle est ainsi nommé, d'autant que (selon la tradition commune) le corps du Rédempteur étant détaché de la croix, fut oint et embaumé sur icelle par Joseph d'Arimathie et Nicodème : elle est distante environ dix-huit pas de l'entrée de l'église qui est presque à son opposite : sa longueur est de huit pieds, sa largeur de deux un peu plus ; Sainte Hélène l'a fait couvrir de cette pierre que l'on y voit à présent, dont la couleur tire sur le vert : elle est relevée de cinq bons doigts du pavé, toute entourée d'un petit balustre de fer d'un pied de hauteur, afin que les pieds des passants ne viennent point à la profaner : il y a quelques belles lampes d'argent pendantes au-dessus qui sont continuellement ardentes, tant de nuit que de jour ».

納めた」[58]。

巡礼たちはいよいよ聖墳墓へと向かう。「この石を左手に進み、わたしたちはゴドフロワとボードワンの墓から 30 歩離れた聖墳墓の方へ進む。そして聖墳墓の周りを一周したのち、わたしたちは扉の前で立ち止まった。そして神父たちが祈りを終えると、修道院長が巡礼たちとともに聖墳墓の中に入り、巡礼に向かって短く励ましの言葉をかける。そのあと、各自が祈りやその他の信心をする」[59]。

この礼拝堂は教会と同じく「聖墳墓」と呼ばれる。第 10 ステーションの聖墳墓礼拝堂はそれ自体が独立した建物になっているが、現存のものは 19 世紀の再建である。

聖墳墓教会のこの部分は聖墳墓礼拝堂を中心とした円形状になっており、上部は柱とアーチに支えられた丸天井になっている。その中心には穴があいていて、外部からの光が取り入れられるようになっている。巡礼たちは礼拝堂の構造を詳細に描写している。

> 聖墳墓は大きな丸天井の開口部の下、教会の中央にある。全体はむき出しの岩から切りだされ、敷石の上に立ち、長方形の礼拝堂の形になっていて一方は半円形になっているが、五角形もしくは五面体で、すべての面は板でおおわれて（というかむしろ板張りされて）いる。10 本の小さな柱と白大理石のコーニス（蛇蛇腹）がある。礼拝堂の上部は全く平らでちょうど頂上に、前に述べた開口部の下に鉛で覆われた小さな丸天井がある。この丸天井はコリント風に細工されたコーニスのある 12 本の高いが繊細な小さい柱に支えられている。柱はかなり太い柱の下、2 本ずつ置かれている。これらすべての柱は斑岩と同じような色である。雨が降ると雨水がこの小さな丸天井に落ち、細い水路をとおって下の方に落ちていく[60]。
>
> この神聖な建築物の外側の形についていえば、上部が真っ平らでコーニスを支える小さな柱がある。白い大理石の美しい石板で周囲をすべて囲まれている。上部には鉛で覆われた小さなドームが見える。丸い 12 本の小さな柱で支えられていて、この柱は一部は斑岩で、一部は茶色みを帯びた大理石であり、高さ 8 ピエ、とてもきれいに整えられ等間隔に並べられている。礼拝堂の正面は四角形で、この建物全体が後方部分に向けて円形になってい

---

[58] ヨハネ福音書 19 章 41～42 節。

[59] Manuscrit, *op .cit.*, pp. 222-223 : « Laissant cette pierre à main gauche, on va vers le Saint-Sépulcre éloigné des sépulcres de Godefroi et Baudoin trente pas, et après avoir fait le circuit du Saint-Sépulcre, nous nous fermâmes [arrêtâmes] devant la porte, et les pères après avoir achevé leurs oraisons, le Père Gardien entre dans le Saint-Sépulcre avec les pèlerins auxquels il fait une petite exhortation. Après laquelle chacun fait ses prières et autres dévotions ».

[60] Manuscrit, *Ibid.*, p. 223 : « Le Saint-Sépulcre est sous l'ouverture de la grande coupe et au milieu de l'église taillé tout alentour et au-dehors d'un rocher vif, élevé sur le pavé en forme d'une chapelle d'une carrure [forme carrée] longue finissant en un demi-cercle, mais pentagone ou à cinq faces, toute plâtrée avec des planches (ou plutôt planchée [planchéiée]) avec dix petits piliers et les corniches de marbre blanc. Elle est toute pleine ou plate en haut ayant tout justement au sommet sous ladite ouverture une petite coupe couverte de plomb, soutenue avec ses corniches travaillées à la corinthienne de 12 hauts mais délicates petits piliers disposés ou mis deux à deux sous un fort gros pilier, tous de couleur semblable au porphyre. Quand il pleut, l'eau tombe sur cette petite coupe avec de petits canaux qui la conduisent en bas ».

る。この建物にくっついてコプト教徒が礼拝堂を建て、そこで聖務を行っている。それがこの美しい建築物全体に著しい不均衡を与える原因になっている[61]。

礼拝堂の内部に入ると、天使の礼拝堂と呼ばれる小部屋がある。イエスの墓を訪ねようとした女たちの前に天使が現れ、イエスの復活を告げたとされる場所である[62]。

この神聖な場所は 2 つに分けられている。つまり礼拝堂と前室の礼拝堂である。前室の方は東向きで天使の礼拝堂という。もうひとつは西向きで、これが洞窟の礼拝堂もしくは主の墓の礼拝堂である。むき出しの岩に掘られ、2 つでひとつの建物になっており、外部も内部も美しい白大理石で飾られている。天使の礼拝堂は壁にある 4 つの小さな開口部から明かりをとっている。南の壁に 2 つ、北の壁に 2 つあいている。（中略）この天使が座っていた石は神聖なモニュメントの洞窟の扉から 1 歩しか離れていなくて、高さ 1 ピエ、縦横 1 ピエ半の四角形である。礼拝堂の扉は東向きで少なくとも高さ 6 ピエ、幅 3 ピエある。床もモニュメントの床も斑岩が混じった美しい白大理石である[63]。

この天使の礼拝堂の奥がキリストの墓になる。礼拝堂に入る小さな扉は、身をかがめないと頭をぶつけるほど低い。2 メートル四方ほどのとても小さな部屋の内側は大理石張りになっており、入って右手（北側）には高さ 66 センチの石のベンチがある。

内部は、聖墳墓がある礼拝堂のくぼみ全体が前述の岩に掘られていて、ほとんど 8 ピエ立方の広さがあるが、幅よりも高さの方が少しある。とはいえさほどの違いはない。この礼拝堂の下部に聖墳墓が含まれ、大部分は横壁や上部と同じ大理石で床と同じように覆われ飾られている。そのため主の体が横たわっていた場所を見ることはできない。
しかし、これが祭壇の代わりになっていて、わたしのときにはカトリックだけがここでミサを挙げることができた。（わたしが神に感謝をささげながら 3 回もやったように）。他の

[61] Des Champs, *op. cit.*, p. 487 : « Quant à la forme extérieure de ce saint bâtiment, il est tout plat au-dessus, et garni tout alentour de belles tables de marbre blanc avec des petites colonnes soutenant la corniche. Sur le haut vous voyez un petit dôme couvert de plomb, et porté par douze petits piliers ronds, de porphyre en partie, et en partie de marbre tirant sur le brun, hauts de huit pieds, fort bien arrangés et d'une égale proportion. Le frontispice de la chapelle est en carré, et tout cet édifice va finissant par-derrière en forme ronde, contre lequel les Cophites ont aussi bâti une chapelle où ils font l'office divin, ce qui cause une deformité [difformité, laideur] notable à toute cette belle structure ». 1573 年以降、聖墳墓礼拝堂の建物の背面に隣接する礼拝堂はコプト教徒が管理している。ここにはアリマタヤのヨセフとその 2 人の息子の墓が祭られている。

[62] マタイ福音書 28 章 1〜7 節。

[63] Des Champs, *Ibid.*, p. 484-485 : « Ce saint lieu est divisé en deux, savoir en chapelle et anti-chapelle, l'anti-chapelle qui regarde l'orient, se nomme la chapelle de l'Ange ; et l'autre qui regarde l'occident, c'est celle de l'antre ou du Sépulcre de notre Seigneur, taillé dans le vif roc, et l'une et l'autre ne faisant qu'un corps de bâtiment, est garnie de beau marbre blanc tant au dehors qu'au dedans, celle de l'Ange reçoit sa lumière par quatre petites ouvertures dans la muraille, deux du côté du midi et deux du côté de septentrion […] Cette pierre [sur laquelle l'ange était assis] est éloignée seulement d'un pas de la porte de l'antre du sacré monument, haute d'un bon pied et d'un et demi en carré : la porte de cette chapelle qui regarde l'orient a pour le moins six pieds de hauteur et trois de largeur, son pavé aussi bien que celui dudit monument est d'un beau marbre blanc entremêlé de pierres de porphyre ».

キリスト教徒は入口の左手で祈りをささげるためだけにここに入るだけだった。祭壇は長さ 8 ピエ、幅 4 ピエで、およそ 3 ピエの平らな箱のような形で、床面よりも高くなっている。残りの空間は 4 人の人間が並べるくらいで、入口の幅（入口は東の方）は 1 と 4 分の 3 ピエである。この入口は灰色の大理石でできていて、ここに入るには頭を下げるかとても背が低くないといけない[64] 。

聖墳墓の洞窟については、だいたい長さ 7 ピエ半、幅 7 ピエ、高さ 9 ピエと少しある。救世主が埋葬された場を覆う祭壇はすべての面が美しい白大理石の板で飾られていて、礼拝堂の一番大きな部分を占めている。この祭壇が北側の部分にあり、床から 3 ピエの高さになっていて、幅はほとんど 3 ピエ半、長さはだいたい洞窟の長さと同じくらいで、わたしたちの主の復活を表現した美しい絵が飾られている。東にあるこの洞窟の扉はとても美しい大理石でできていて、高さは 4 ピエしかなく幅は 2.5 ピエしかない。したがって中に入るには頭を腹まで下げなければならない。（中略）この神聖なモニュメントのこの祭壇でミサを挙げることはわたしたちの修道士とカトリックの司祭にしか許されていない。この場所はあまりに狭いので司祭のほかには最大 4 人までしか中に入れられない。ミサを聞きたい人は前室の礼拝堂に立っていなければならない[65] 。

巡礼の記述は詳細で、岩に穿たれた墓は狭く天井も低いため中に入れる人数が限られていることがよくわかる。修道士たちはその狭い礼拝堂でミサを挙げるという特別な体験に感動している。なお、この礼拝堂には沢山のランプが奉納されて常に灯がともされているため、丸天井がすすで真っ黒になっていることも指摘されている。

聖墳墓はカルヴァリオの丘の最後の階段から 108 ピエ離れている[66] 。北側の祭壇には古い

---

[64] Manuscrit, *op. cit.*, pp. 223-224 : « Au-dedans, toute la concavité de cette chapelle dans laquelle est le très Saint-Sépulcre, est pareillement coupée dans la susdite roche ayant presque huit pieds en carrure [carré], mais tant soit peu plus haute que large cependant peu différent, de laquelle le Saint-Sépulcre comprend par en bas la plus grande partie couverte et ornée de même que sont ses flancs et le pavé de même marbre que sur le dessus, et pour cela on ne voit au-dedans le lieu où gisait le corps de Notre Seigneur. / Mais ceci sert d'autel sur lequel à mon temps les catholiques seuls célébraient (comme j'ai fait trois fois en rendant grâces très humbles à Dieu). Les autres chrétiens y entraient pour faire seulement leurs prières à main gauche de l'entrée. Il est long huit pieds et large de quatre en forme d'un coffre plat environ trois pieds, plus haut de la superficie du pavé. Le reste de l'espace est pour quatre personnes de front, la largeur de l'entrée (laquelle est vers le levant) est d'un pied et trois quarts. Cette entrée est faite de marbre gris et pour y entrer il faut s'abaisser ou être fort petit de stature.

[65] Des Champs, *op. cit.*, pp. 485-487 : « Quant au concave de l'antre du Saint-Sépulcre, il y a environ sept pieds et demi de longueur, sept de largeur, et de hauteur neuf un peu plus : l'autel qui couvre le lieu où le Sauveur a été enseveli, et qui est garnis de tous côtés de belles tables de marbre blanc, en occupe la plus grande partie : cet autel est assis du côté septentrional, relevé du pavé de la hauteur de trois pieds, en ayant presque trois et demi en sa largeur, en sa longueur il égale à peu près celle de l'antre, et il est orné d'une belle peinture qui représente la Résurrection de notre Seigneur : la porte de cet antre qui est à l'orient et d'un très beau marbre, n'est haute que de quatre pieds, et large de deux et demi, de façon que pour y entrer il faut de nécessité baisser la tête jusqu'au ventre [...] il n'est permis qu'à nos religieux et aux prêtres catholiques de célébrer la sainte messe sur le susdit autel du sacré monument. Ce lieu est si étroit qu'il n'y a que le prêtre avec quatre autres personnes tout au plus, qui y puisse demeurer ; ceux qui veulent ouïr la messe sont obligés de se tenir dans l'anti-chapelle ».

[66] グージョンは 77 歩としている（Goujon, *op. cit.*, p. 167）。30 メートルほどと考えてよいだろう。

絵があり、イエス＝キリストの復活が描かれている。丸天井もしくは残りの建造物は、入口の左側がかなり大きく、前述の同じ岩からすべて切りだされている。色は白だが、ここに大量にあるランプの煙のせいですっかり汚れ黒くなっている（大理石の部分を除く）。ランプの中には外部の次の間の礼拝堂のものも含まれる。こちらは 63 個あり常に燃えていて、ほかの明かりはひとつもない[67] 。

それから、この聖なる場所は常に燃えている 20 の美しい銀製のランプで飾られていて、その煙が丸天井を真っ黒にしているので天井がむき出しの岩なのか大理石なのか区別できないほどである。とはいえ煙を逃がすための穴や天窓があるのだが[68] 。

右手にこの素晴らしい場所、そこからわたしたちの救世主イエス=キリストがわたしたちの栄光のため復活されたのだが、白大理石で覆われて、天使の礼拝堂と同じくらいの数の 60 の銀のランプで照らされているのが見える[69] 。

ランプは聖墳墓礼拝堂に 20、天使の礼拝堂に 40 前後あったものと思われる。小さな礼拝堂だけに煙が逃げず、天井がすすだらけになっていたのだろう。だが、聖地中の聖地のひとつを訪ねることのできた巡礼たちの感動は想像に難くない。子どものころから繰り返し聞いたり語ったりした福音書の話通りの場所がまさに目の前に広がっているような思いだったのだろう。リエージュの無名の司祭はこう書き残している。「だれでも聖墳墓に入る者で体の内外部に何か特別な動きを感じないで入る者はいない。実際、わたしは全身が震えていたし、頭髪でさえもその震えを感じていた。仲間たちもみな何らかの感動を覚えたと言っていた。これは容易に信じられることだ。特にあのような聖なる神秘について本当に熟考するときには」[70] 。客観的な描写が多く、心情を吐露することの少ない人物には珍しいことである。

3. 11. マグダラのマリアへの出現

イエスの墓への訪問を終えた行列は、聖墳墓礼拝堂を出ると左手に向かう。復活したイエスが

---

[67] Manuscrit, *op. cit.*, p. 224 : « Le Saint-Sépulcre est éloigné des derniers degrés du mont de Calvaire cent et huit pieds. Sur l'autel vers tramontane, il y a un tableau ancien sur lequel la Résurrection de Jésus-Christ est dépeinte. La voûte ou le reste de la solidité ou densité, laquelle est assez grosse du côté gauche de l'entrée, est toute coupée hors de la même roche ci-dessus mentionnée et qui est de couleur blanc mais toute offusquée [obscurcie] et noircie (excepté où il y a du marbre) par la fumée des lampes qui y sont en assez grande quantité y comprises celles qui sont dans l'anti-chapelle de dehors, savoir de 63, continuellement ardentes, n'y ayant autre lumière ».

[68] Des Champs, *op. cit.*, p. 486 : « Au reste, ce lieu saint est enrichi de vingt belles lampes d'argent continuellement ardentes, et dont la fumée a tellement obscurcie la voûte que l'on ne saurait discerner si c'est le vif roc ou bien du marbre, quoi qu'il y ait des trous ou soupirails [soupiraux] pour l'évaporer ».

[69] Goujon, *op. cit.*, pp. 167-168 : « l'on voit cet adorable endroit à la droite, d'où Jésus-Christ notre Sauveur ressuscita pour notre gloire, couvert de marbre blanc, et éclairé de soixante lampes d'argent tant en celle-ci qu'en celle de l'Ange ».

[70] Manuscrit, *op. cit.*, p. 231 : « Il est certain que qui ce soit n'entre dans le Saint-Sépulcre sans qu'il ne ressent quelque mouvement particulier et intérieur et extérieur. En effet je frémis tout et les cheveux de la tête même s'en ressentirent. Et chacun de la compagnie confessa avoir eu quelque émotion. Ce qui est facile à croire et surtout quand on fait une vraie réflexion à ces saints mystères ».

マグダラのマリアの前に出現したとされる場所[71] で、福音書の描写に忠実に聖墳墓のすぐそばに位置している。「聖墳墓から出て北の方に行列と一緒に 15 歩ほど歩いて、すぐ隣の丸い大理石のところに進む。この石は敷石の中にあり、白と灰色の大理石の複数の円で周囲を飾られている。この石は主が復活後にマリー＝マドレーヌの前に庭師の姿で現れたのと同じ場所に置かれている。マリー＝マドレーヌはそのときこの石から出現の礼拝堂の方に 5 歩離れた、別の（でもより小さな）大理石の上に座っていた」[72] 。

イエスの処刑後 3 日たって墓を訪れたマグダラのマリアは、墓を閉じていた石がどかされて中が空っぽになっているのに気付く。嘆き悲しむマリアの前に復活したイエスが現れたが、マリアには最初それが誰だかわからず園丁だと思い、会話を交わす間にそれがイエスだと気づいた、というエピソードを記念している[73] 。敷石にはめ込まれた灰色の石がこのときイエスが立っていた場所を示している。「聖墳墓から北に 20 歩のところ、行列を終えようとするとき、床にはめ込まれた丸い石の前を通る。石は灰の色で、灰色と白の大理石の円に囲まれており、直径は約 5 ピエある。この石は栄光ある復活ののち、主が庭師の格好でマリー=マドレーヌの前に現れた場所を示している」[74] 。

『黄金伝説』はイエスが他の弟子たちよりもまずマグダラのマリア（マリー=マドレーヌ）の前に出現した理由をいくつか述べているが、それはマリアが愛に満ち、罪人であり、女が生の告知者でもあったことを示すためだと説明している[75] 。

3. 12. 聖母への出現

巡礼の行列は教会内を一周して出発点の出現の礼拝堂に戻ってくる。第 12 ステーションはイエスが聖母に出現したとされた場所を記念している。

福音書は先のマグダラのマリアへの出現を始めとして 10 度のイエスの出現を記録している、とウォラギネは述べている[76] 。最初にマグダラのマリアに、次に女たちの前に（マタイ福音書 28 章 9〜10 節）、ついでシモン・ペテロの前にも現れる（ルカ福音書 24 章 34 節）が、このエピソードはエマオの 2 人の弟子への出現（ルカ 24 章 13〜35 章）の中に伝聞として出てくるのみで、い

---

[71] ヨハネ福音書 20 章 11〜18 節。

[72] Manuscrit, *op. cit.*, pp. 225-226 : « Partant du Saint-Sépulcre, on va avec la procession 15 pas plus avant vers tramontane tout voisin d'une pierre de marbre ronde, laquelle est dans le pavé, embellie tout alentour avec quelques cercles de marbre blanc et gris. Cette pierre est mise dans la même place où Notre Seigneur après sa Résurrection apparut à Marie Madeleine en forme de jardinier. Elle était pour lors assise sur une autre pierre de marbre (mais plus petite) éloignée cinq pas de l'autre, tirant vers la chapelle de l'Apparition ».

[73] このシーンは絵画のテーマとして好まれ、フィレンツェのサン=マルコ修道院にはフラ・アンジェリコによる作品がある（1440〜1441 年制作）。

[74] Des Champs, *op. cit.*, p. 491-492 : « A vingt pas du Saint-Sépulcre vers le septentrion, en achevant la procession, l'on passe devant une pierre ronde fichée dans le pavé, de couleur de cendre, et entourée d'un cercle de marbre gris et blanc, ayant environ cinq pieds de diamètre. Cette pierre marque le lieu où notre Seigneur s'apparut en forme de jardinier à sainte Marie Magdaleine après sa Résurrection glorieuse ».

[75] ウォラギネ『黄金伝説』第 2 巻、22〜23 ページ。591 年ごろ教皇グレゴリウス 1 世がマグダラのマリアとベタニアのマリア（ラザロとマルタのきょうだい）、無名の罪深い女（ルカ福音書 7 章 36〜50 節）を同一視し、その後マグダラのマリアはイエスの弟子であると同時に罪を犯した女のイメージで語られるようになった。

[76] ウォラギネ『黄金伝説』第 2 巻、22 ページ以下。

つどこでイエスが出現したのかは明示されていない。その後、ユダヤ人を恐れて引きこもっていた弟子たちの前にもイエスは出現する（ヨハネ福音書 20 章 19〜22 節）。この 5 回の出現は復活の当日の出来事とされている。

復活から 8 日後にトマスや弟子たちの前に（ヨハネ福音書 20 章 24〜29 章）、ティベリアス湖畔で漁をする弟子たちに（ヨハネ福音書 21 章 1〜14 節）、「イエスが指示しておかれた山」（タボル山とされる）で弟子たちに（マタイ福音書 28 章 16〜20 節）、食事中の 11 人の弟子の前に（マルコ福音書 16 章 14〜18 節）、天にあげられる前にオリーブ山で弟子たちの前に出現したという（ルカ福音書 24 章 36〜51 節）。これが福音書に記された復活後のイエスの 10 度の出現である。

しかし、これ以外にも福音書に記録されていない出現が 3 度あったとされる。イエスの処刑以後断食を続けていた使徒小ヤコブのもとに現れたイエスは復活したことを告げ、断食をやめるように告げた[77]。また、イエスの遺体をもらいうけて埋葬したアリマタヤのヨセフは、このことが原因でユダヤ人に捕らえられて監禁された。そこへ復活したイエスが現れ、ヨセフを家に連れ帰ったという。

そして、マグダラのマリアに出現するよりも早く、イエスは聖母マリアのもとに現れたのだという。「主にしてみれば、ほかの人たちよりもまずおん母に復活を知らせてよろこんでいただく必要がおありだったからである。なぜなら、主が死なれたとき、だれよりもいちばん苦しみを味わわれたのは、おん母だったからである。事実、あんなにいそいで人びとをなぐさめに行かれた主が、おん母をお忘れになるというようなことはありようもなかったのである」[78]。愛を説くイエスが、誰よりも悲しんだはずの母親のもとに現れないわけがないとの思いからできた伝説なのだろうか。

4. おわりに

聖救世主修道院の院長を先頭にした巡礼たちの行列はこうして、イエスの処刑・死・復活をたどって終わる[79]。

オスマン=トルコ帝国内では税金を払いさえすればほぼ信仰の自由が認められていた状態だったので、巡礼たちはイスラム教徒はもちろんのこと、時にはイスラム教徒に対するよりも敵意を抱いていたらしきギリシャ正教徒や、シリア教会やエジプトのコプト教徒など、母国にいたのでは会うことができないようなさまざまな宗教を信仰する人々に出会うことになる。

そして聖墳墓教会の内部では、まるで世界の縮図であるかのようにさまざまな宗派のキリスト

---

[77] ウォラギネ『黄金伝説』第 2 巻、158〜159 ページ。
[78] 同書 27 ページ。
[79] この後巡礼たちには自由時間が与えられるようで、もう一度順路通りに回る者もいれば休息する者もいる。「わたしたちの巡礼が終わると、もう一度出現の礼拝堂に入り、そこで修道士たちは祭司の飾りをすべてとり、それから各自が朝課を歌う真夜中を待ちながらそれぞれ休憩するために引き下がった。1 時間ほど休憩した後、何人かはまた起き上がってもう一度すべての聖所を訪ねた」。(Manuscrit, *op. cit.*, p. 226 : « Après avoir fini nos dévotions, nous entrâmes derechef dans la chapelle de l'Apparition où les religieux quittèrent leurs ornements sacerdotaux et ensuite un chacun se retira pour un tant soit peu reposer en attendant minuit qu'on chanterait les matines. Après une heure ou environ de repos, quelques-uns se levèrent de nouveau et allèrent derechef visiter tous les saint lieux »).

教会が礼拝堂や祭壇を管理し、聖務を行っている。

福音書に語られるイエスの受難と復活をたどるためのステーションでは、それぞれ唱えるべき祈りの言葉や賛美歌などが決められている[80]。しかし、重要なのはこれらの決まりだけではない。リエージュの司祭はおそらくもっとも大事なことを最後に書きとめている。「行列の前に巡礼一人一人に小冊子が渡され、その中にはすべての祈りの言葉、讃美歌、先唱句などが含まれている。文字を読めない人は贖宥を得るためにはすべてのステーションで主の祈りとアヴェを唱えるだけでよい（実際のところは贖宥を得るために、なによりもわたしたちの贖罪の地を訪れ、あがめ、瞑想するためにこの壮大でつらい旅をしようと決心するのだし）[81]」。許しを求め、信仰の場で自身の信仰を見つめ直すこと、そして実際にその場に行けないとしても、テクストを読むことを通してこの貴重な体験を追体験または疑似体験することを期待しているのではないだろうか。

主要参考文献

［17 世紀の資料］

本稿中の引用はすべて現代フランス語に直した。ただし一部の固有名詞については原文を尊重している。ブーシェ（17 世紀のテクスト）、デシャン、グージョン、シュリウス、テヴノーのテクストに関しては、Google books で参照可能。

BOUCHER, Jean, *Le Bouquet sacré composé des plus belles fleurs de la Terre sainte*, éd. Marie-Christine Gomez-Géraud, Champion, 2008.

ブーシェは、1611 年 11 月から翌年 4 月までエルサレムに滞在している。彼の巡礼記は 1614 年に出版された。この巡礼記は 17 世紀だけで 50 版以上を数える大ベストセラーになった。

DESCHAMPS, Barthelemy, *Voyage de la Terre Sainte et du Levant*, Liège, Pierre Danthez, [1678].

リエージュ出身のフランシスコ会士。1667 年聖地に滞在。

GOUJON, Jacques, *Histoire et voyage de la Terre-Sainte*, Lyon, Pierre Compagnon et Robert Taillandier, 1672.

フランシスコ会士（1621－1693 年）。1668 年聖地に滞在。

SURIUS, Bernardin, *Le Pieux Pelerin, ou Voyage de Jerusalem*, Bruxelles, François Foppen, 1666.

フランシスコ会士、1646～1647 年聖地に滞在。

THEVENOT, Jean, *Relation d'un voyage fait au Levant*, Paris, Thomas Joly, 1664.

フランスの旅行家、1657 年聖地滞在。

Voyage à Constantinople, en Egypte, en Terre-sainte, dans quelques îles de l'Archipel, etc., Manuscrit conservé à la Bibliothèque municipale d'Amiens, cote Ms LESC 81B.

筆者はリエージュ出身の無名の司祭。1669 年 6 月から 7 月にかけて聖地に滞在。テクストは 1693 年から 1694 年にかけて執筆された。詳細は拙稿「聖地巡礼—17 世紀リエージュの司祭の旅行記—」。（『筑波大学フランス語・フランス文学論集』第 23 号、2008 年、27～49 ページ）を参照のこと。

［論文・著作］

AVIGDOR, Eva, « Jérusalem dans la mémoire du XVIIe siècle », in *Papers on French Seventeenth Century Literature*,

[80] デシャンの巡礼記にはこれらの祈りの言葉などがラテン語で挿入されている (Des Champs, *op. cit.*, p. 482 など)。

[81] Manuscrit, *Ibid*., pp. 226-227 : « Devant la procession on donne à chaque pèlerin un livret, dans lequel sont contenues toutes les oraisons, hymnes, antiennes, etc. et ceux qui ne savent lire sont obligé de dire seulement un Pater Noster et Ave à chaque station pour gagner les indulgences (Et en effet on se résout à faire ce grand et pénible voyage pour les gagner et en premier lieu pour visiter, adorer et contempler les lieux de notre Rédemption) ».

XXI, 1994, n° 21, p. 485-498.
BILLIOUD, Jean-Michel, *Histoire des chrétiens d'Orient,* Paris, l'Harmattan, 1995.
CHELINI, Jean et BRANTHOMME, Henry, *Les Chemins de Dieu, Histoire des pèlerinages chrétiens des origines à nos jours*, Paris, Hachette, 1982.
DUPRONT, Alphonse, *Du Sacré, Croisades et Pèlerinages, Images et langages*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque des Histoires », 1987.
GOMEZ-GERAUD, Marie-Christine, *Le Crépuscule du Grand Voyage, Les récits des pèlerins à Jérusalem (1458-1612)*, Paris, Champion, 1999.
JANIN, Raymond, *Les Eglises orientales et les rites orientaux*, Paris, Bayard, 1926.
MAUZAIZE, Jean, *Le Rôle et l'action des Capucins de la province de Paris dans la France religieuse du XVII*ème *siècle*, thèse de doctorat, Université de Paris IV-Sorbonne, juin 1977 ; Lille, Université de Lille III, Paris, Champion, 1978, 3 vol.
MEISTERMANN, P. Barnabé, O. F. M., *Guide de Terre Sainte*, Paris, éditions Franciscaines, Letouzey & Ané, 1935.

高橋正男、『図説聖地イェルサレム』、河出書房新社、ふくろうの本、2003 年。
立山良司、『エルサレム』、新潮社、＜新潮選書＞、1993 年。

［聖書・古代の著作］
La Bible de Jérusalem, tr. Ecole biblique de Jrusalem, Paris, Desclée de Brouwer, 2000.
La Bible, traduction de Louis-Isaac Lemaître de Sacy, éd. Philippe Sellier, Paris, Robert Laffont, « Bouquins », 1990.
聖書、新共同訳、旧約聖書続編つき、日本聖書協会、2007 年。
本稿中の引用、聖書中の地名・人名表記に使用。
Jacques de Voragine, *La Légende dorée*, tr. J. -B. M. Roze, Flammarion, 2 vol., 1967.
邦訳　ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』、人文書院、4 巻。第 1 巻、前田敬作・今村孝訳、1979 年。第 2 巻、前田敬作・山口裕訳、1984 年。第 3 巻、前田敬作・西井武訳、1986 年。第 4 巻、前田敬作・山中知子訳、1987 年。

［辞書・辞典］
FURETIERE, Antoine, *Le Dictionnaire universel d'Antoine Furetière*, Paris, Le Robert, 1978, 3 vol. [1690].
GODEFROY, Frédéric, *Dictionnaire de l'ancienne française et de tous ses dialectes du IX*e *au XV*e *siècle*, Paris, Kraus reprint, 1965, 10 vol. (http://www.lexilogos.com/francais_dictionnaire_ancien/htm)
*Trésor de la langue française, Dictionnaire de la langue du XIX*e *et du XX*e *siècle (1789-1960)*, Paris, Editions du centre national de la recherche scientifique, 1971-1994, 26 vol. (http://atilf.atilf.fr/tlf.htm)
『キリスト教人名辞典』、日本基督教団出版局、1986 年。
『キリスト教用語辞典』、小林珍雄編、東京堂出版、1954 年。
『新聖書辞典』、泉田昭他編、いのちのことば社、1985 年。

（ふじい　ようこ / 実践女子大学非常勤講師）